

## GWの山の遭難から

5月7日、パソコンに向かっている。一昨日(5日)、朝刊を広げたら「白馬岳で6人遭難か」、という見出しが目に飛び込んできた。記事の後半には爺ヶ岳でも遭難の報。「吹雪で身動きが取れない」と、山小屋に女性から連絡があり、その後、連絡が取れないという。「現地は4日午後、一時吹雪だった」と記事にはあった。一時吹雪ということは、もう収まっているんだろうから、捜索隊が出ていけば見つけてくれるだろう、なんて思いながら新聞を畳んだ。

午後になって、朝日新聞と共同通信から電話が入った。白馬岳で6人、爺ヶ岳で1人、涸沢岳で1人が捜索隊により発見、死亡が確認された。中高年の相次ぐ遭難に意見を求められた。率直に言わせてもらえば、「やっぱり・・・」とぼくは思ったのだ。起こるべくして起こった遭難だと思わざるを得ない。昨日の朝刊は、「春山遭難8人死亡」と一面に報じていた。社会面には、天気急変 牙むく春山」と大きな見出しがあり、「猛吹雪、冬装備なし(白馬岳の6人)」というくくりで、白馬パーティーの顛末を報じ、「60歳以上の遭難年々増加」として中高年登山者の問題を指摘している。

記事には、「警察庁によると、2010年の山岳遭難者は2,396人で、1961年以降、最多だった。とくに60歳以上の遭難者は、08年に1,004人、09年に1,040人、10年に1,198人と年々増加している」とある。ぼくは、81年に創立した登山学校「無名山塾」の中に、83年に中高年バージョンとして「遠足倶楽部」という会を誕生させた。そこで、毎月1回『山の遠足連絡帳』という会誌を出し10年の5月号のタイトルは、「ゴールデンウィークの山から」、拙文の一部を紹介しよう。

「大津パーティーは唐松岳に登った。へっぴり腰で下ってくる登山者がいた。足元をみると4本爪の軽アイゼンにストック。冬靴にワンタッチの12本爪アイゼン、ピッケルを手にするこちらのメンバーの目は点になった。1月には雪上訓練も受け、準備万端で臨んだ春山に、向こうは4本爪アイゼンにストックじゃあ、目も点になる。

小屋に到着、アイゼンを脱いで中に入る。受付手続きしている間にも、他パーティーが到着。アイゼンを履いたまま、ガキガキ音を立てて入ってくる。「外でアイゼンを脱ぐように」と張り紙があるのに、だ。そんな無神経な中高年登山者が増えているような気がしてならない。天気もいいので、外で景色を楽しんでいると、軽アイゼンで五竜岳に向かう登山者が少なからずいるのに啞然とする。経験不足の上、装備も悪いから、牛首の岩場で渋滞している。眺めていてハラハラしたと、大津講師は報告。残雪期のメイン装備が軽アイゼンとストックになっちゃっている。これは問題だ。昔も軽アイゼンで登ってくる輩はいたが、例外だった。そんな奴は、山を知らない危ない奴ということで、周囲から冷たい目で見られていた。周囲があったのである」。

この記事は一昨年5月のものだが、それより以前から中高年登山者の一部に危うさを感じ

じていた。なんでこんなことになってしまったのか、「冷たい目で見ると周囲が無くなった」ことに問題の根がありそうな気がしてならない。

新聞の見出しに、「60歳以上の遭難 年々増加」とある通り、今回の遭難当事者は全員60歳以上である。高齢だから春の北アルプスに登る資格がない、ということはないが、周囲から冷たい目で見られないだけの経験・体力・技術を有していたのだろうか。「夏山でも歩くような格好だったという」という新聞報道で見ると、危機管理ができていないというしかない。爺ヶ岳に62歳の女性が一人で登るというのも、山を甘くみすぎていないだろうか。起こるべくして起こった事故、という所以である。

先日、洞井孝雄さんから最新著書『安心登山の技法』を送って頂いた。洞井さんは、愛知県勤労者山岳連盟会長でもある。本書のタイトルを「安全」ではなく、「安心」としたことについて、「『安全』とは『危なくないこと』をいうが、山の高低難易にかかわらず、登山は常に危険と背中合わせであり、それを続けていく以上、『危なくないところ』はないし、『危なくないこと』もない。空いては自然、何が起こるか分からない。登山のスキルを上げることはもちろんだが、最終的には、登山という行為をおこなう人間の意識や姿勢こそが安全につながる。そのことを理解した上で、自然の中へ踏み込んでいくことができれば、登山する人も、その人たちを送り出す側も、彼らを迎え入れる側の人たちも、余計な心配や神経をとがらせずにすむ。『安心』な登山というのは、そういうことだと思っているからである」と、述べている。ぼく自身も、NHK教育テレビ番組「中高年のための登山学」の中で、安心登山に言及し、「安心登山の十ヶ条」なんていうのも考えてみた。17年も前の話になる。

ぼくが現役の頃には、山岳会が健全に機能、登山教育の場として優れて貴重なものであった。その山岳会が衰退して、教育の場が喪失してしまった。その結果、気が付くとガイド登山・ツアー登山のウェイトがかなり大きくなってしまった。ガイド登山を、登山学校として利用できたらいいが、リピーターさんとして取り込まれてしまったら、なにをかいわんや、である。責任や判断を他人にゆだねてしまうような登山しかやらないのでは、登山者としての質の低下は、必然であろう。責任や判断を自らが引き受ける、自立した登山者の育成が急務である。自立した登山者を育成するには、自立した登山者を育成できる登山インストラクターの養成が必要だ、というのがいま現在のぼくの考えである。4月1日に活動開始宣言を出した「日本登山インストラクターズ協会」を、一日も早く形あるものにしなければなるまい。

過日、映画「サッチャー」を観た。珍しく、感動した。サッチャーは言う。「いまの時代が抱えている問題は、思想やアイデアより、人の感情ばかり気にしていること。みんな考えることを忘れて、感じるだけ。他人の感情を窺うことばかり。他人の感情に行動を左右されている。大切なのは、他人の感情を窺うことではなく、自分が信念を持って行動すること」。

ダメなものは、ダメと言おう。